

女子美術大学 × 西会津町奥川地区 真ヶ沢集落

女子美術大学JVR同好会



1.女子美JVRチームについて

《同好会の概要》

女子美術大学の空間表現や服飾、版画などを学ぶ学部1・2年生で構成されたチーム。

→デザイン、古民家改修、DIY、展覧会企画、ファッション、商品開発、身体表現、ブック制作など分野横断的な制作・実践をできることが強み。

《応募理由》

真ヶ沢集落内には活動拠点となる

「農と暮らし」（古川利意記念美術館）があり、美術で地域と繋がる基盤があった。

これらの環境を活かし、女子美生の専門性を生かして地域とアートの新しい関係を築きたいと考え、応募した。



古川利意記念美術館「農と暮らし」

<https://ftmg.localinfo.jp/>

2.集落のイメージと実際

活動前に抱いていた真ヶ沢のイメージ

- 過疎化・高齢化が進み、静かで閉じた印象
- 私たちが警戒されてしまうのではないか？

活動を通して見えてきた真ヶ沢の姿

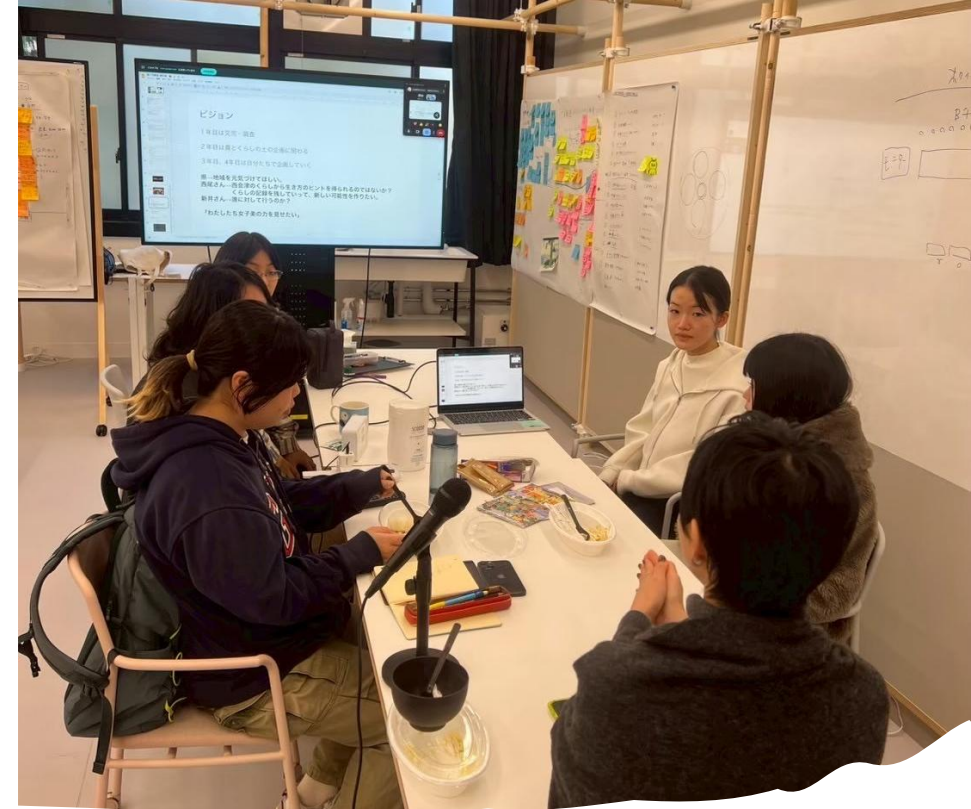
- 文化や誇りが息づく、豊かな暮らしの風景があった。
- 集落の人みんながとてもタフで生き生きと生活している。
- 何かあればあれやこれやと話が進むので1日があっという間に過ぎている。



一年目の活動では、
具体的なアートプロジェクトの実施を目的とせず、
集落住民との対話や真ヶ沢集落の調査を中心に取り組んだ。

住民への聞き取り調査や商店・カフェでの交流を通し
暮らしや文化の記憶を掘り起こしながら、
顔の見える関係づくりを大切にした。

また、住民の語りや集落の空間、民俗要素を
多角的に収集・整理し、学生間で共有する
「真ヶ沢集落備忘録」として継続的に運用している。



3.今年度の活動内容

滞在調査：大学の長期休み期間に訪問
ミーティング：毎週水曜日



4.活動により発見した課題活かすべきこと

観光・イベント依存の限界

派手な催しだけでは関係は続かず、
日常的な対話と信頼構築が
不可欠であることが分かった。

現在進行形の暮らしを捉える重要性

過去の懐古に留まらず、今を生きる住民の営みを
丁寧扱うことが地域の魅力を正しく伝える鍵となる

「翻訳装置」としての芸術の可能性

アートは装飾ではなく、
地域の記憶や価値を内外へ伝えるための
有効な手段になり得る。



5. 課題解決のための提案

美大生ならではのアウトプット

- ZINE（小冊子）制作
- 調査で得た地域の魅力を発信

集落のビジュアル化

- 新たな詳細「集落マップ」の作成

再解釈

- 昔語りの紙芝居・絵本化
- 販売車や空き地の活用・装飾案
- 民謡や物語の現代的再編集



6. 今後に向けて

1年目 | 交流・調査

住民との信頼関係を築き、集落の空気、暮らしのリズムを理解する。

2年目 | 参加・深化

農業や地域企画に参加し、生活により深く関わりながら関係性を深める。

3～4年目 | 協働・自立

住民と協働した表現活動を行い
学生主体で企画・実践を進めていく。

目標

一過性で終わらせず、地域と持続的に
関わり続ける仕組みを構築する。

